

コンサート会場のロビーにはパラリンピック競技の写真が展示された



読売日本交響楽団

応援コンサート

文京シビックセンターで3月31日に「読売 東京2020パラリンピック応援コンサート」が行われました。前半は選手のトーク、後半はラヴェル作曲の「ボレロ」などクラシックの有名な曲がパラリ

ンピックの映像付きで演奏されました。また、車イス利用者30人も来場し、誰もが楽しんで聴くことができるよう、声が出たり、体が動いたりしても良いようになっていました。(中1/T・O)

できることが自信になる



パラ水泳 木村敬一 選手



車いす卓球 別所キミエ 選手

大事なものは
信頼関係

パラリンピック選手2人にインタビュ

コンサートが終わった後、ゲストでパラリンピック選手の、木村敬一選手と別所キミエ選手にインタビュしました。

木村選手はパラ水泳の選手で、2016年リオデジャネイロ大会では、100メートルバタフライと50メートル自由形で銀メダル、100メートル自由形で、



平泳ぎで銅メダルを取りました。2歳で全盲になって、小4で水泳を始めました。コースロープやプールのかべにあたり、手に傷が多く血がでてまひするほどだそうです。



その努力で獲得した視覚障害者用のメダルは、音がるようにスチール製の球がメダルの中にはいっています。

パラ水泳の視覚障害者グループでは、ターンやタッチのタイミングをコーチがタッピング棒で頭をたたいて知らせます。ターンとタッチの間はとても大切で、タッピング棒でたたいてもらうタイミングも大事になってくるのでコーチとの信頼関係が大切だそうです。パラの競技はマラソンや水泳など信頼関係がとても大切になるものが多いと思います。

(小6/Y・K、中1/C・Y)

「オシャレ」も自慢

別所選手は車いす卓球の選手で、45歳に遊びではじめてのが上手になって4大会連続出場しています。パラリンピックでの最高順位は5位。見どころは障がいによって口にラケットをくわえたり、テープでラケットをにぎるなど残っている所をいかし一生懸命やっている選手もいるところだそうです。

別所選手といえば「オシャレ」です。かみにあみ込んだちょうちよのかざりは大会の時にだけしていますが、今回はパラリンピックの応援なので大会用のオシャレをしていました。今回ちょうちよは片方に20コずつでした。いままでの最大は80コ。その時は自分の年齢の数だけのつもりでしたが、係の人に「もっと」と言われ80コつけたそうです。

(小6/Y・K、中1/C・Y)

五輪競技とは違う苦労

お二人に、「えらんだ競技以外にやってみようかなと思った競技はありますか」とききました。木村選手は今まで本格的にやったスポーツは水泳しかなかったと言い、別所選手はバレーボールをやるうと思ったが、パラだとシッティングでおしりがきずつくし、テニス以外は外で寒いと考えたと言っていました。

別所選手と木村選手に「同じ種目でも、オリンピックの選手とは違う、どのような困難があるのか」も聞きました。別所選手は「車いすで体がとどかない所があるため、いかにどう動くかが勝敗につながる」とおっしゃっていました。木村選手は「前が一切、見えないのでかべにぶつからないようタッピング棒を使う練習などがオリンピックの選手とは違う部分だ」とのことです。また、両方の競技ともルールがオリンピックとは違うそうです。

「それぞれのスポーツのやりがいは」という質問に、別所選手は「たとえ障がいがあっても、できるということが、自信になります」と答えてくださいました。また、「パラリンピックの見どころは」という質問に、「障がいがあることも、こんなにできるんだ！と感じることができると思います」と、木村選手が答えてくださいました。私はパラリンピック選手は「障がいなんて関係ない」と思っているのではないのかと感じました。

今日、二人の選手に取材し、コンサートを聴くことができ障がいのあるなしでかべを作らないことが大切だと学びました。

(中1/C・Y、小5/N・M、中1/T・O)